昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和六十一年七月十五日　発行

# 慈光

続　廃刊号

倶會一處の
世界を念じつつ（ご挨拶）……西元宗助……(1)
たゞ念仏……池山栄吉……(2)
生きるも御恩・死ぬも御恩……川畑愛義……(7)
和光同塵……榊原徳草……(9)
本願真実に値う……井上善右ヱ門……(11)
慈光日誌抄……西元宗助……(14)
二年間に親しい四人を失う……長谷顕性……(19)
無相法信（自覚について）……岩崎成章……(23)
お喚び声一つ……國廣真量……(29)

# 倶會一處の世界を念じつつ

——ご挨拶——

西元宗助

つつしんで誌友の皆様に申しあげます。

先月号巻頭の、花田先生ご令室の悲痛なる「御詫びと御礼」のご挨拶を拝見し、御夫妻のご心中をお察しして、いよいよ来るべきときの来たことを切なく感じたものであります。しかし、このままの廃刊では、あまりにも唐突で、愛惜の情に堪えかねるものがあります。また私どもとしましては、三十八年余にわたる「慈光」誌刊行とそのお導きに対し、一言、感謝の辞を述べさせていただく機会も与えられたいものと思うことでありました。

よって過日、名古屋のセントラル病院に、先生をお見舞いして衷情を披瀝しますと共に、御自宅臥床の令室をご慰問して、続廃刊号を発行して終刊号とさせていただきたいとお願いし、このように刊行されることになった次第であります。

なお先生ご夫妻には、今もなお、誌代等のことを気になさり、まことに申訳ないと言っておられますが、勝手ながら、誌友の皆様のお気持を代表し、このことについては全くご懸念くださる必要はなく、専一にご養生くださるようお願い申した次第であります。その点、ご諒承たまわりますよう宜しくお願い申しあげます。ご夫妻のご健康の回復と倶会一處の広大会の世界を深く深く念じつつ　合掌

（なお、今後、誌代等、ご送金くださらぬようにとのことですので、その点もおよろしく）



# たゞ念仏

池山栄吉

去年の秋の初め頃から、かねての持病が時々発作的症状を伴うようになって、その趨勢が寒くなるにつれて、じりじりと昂ってゆくのを覚えた。師走もなかば過ぎる頃になると、やがて迎える新しい年が何の事はない、高い山でゞもあるかのよう。しかも残る九合目からの勾配がいかにも急で、それを越す力が果して未だ自分に剰されているやら、我ながら覚束なく思わず溜息のもれるのが常であった。が、その中どうやら年は越せたものゝ、病勢は一向退こうともしない。学校も休講して静養を専らとしていたが、とうとう正月の末から二月の初めにかけて重態におちいってしまった。

生死の程も分らないと言うよりは、十中の八九むつかしかろうという見方が支配して、家中が沖々たる憂愁の気配にうずもれていた、自分も今度は駄目かと思った。今夜はまだこうして息をしているが、明日の朝になると、もう眼が閉じてしまっているのではないかと思った。そうだ、息は一つしかなかったのだなァと、常には人の気付かないことに、初めて気付いたような気がした。しかしまだ絶対に死ぬに決まっているとまでは思わなかった。

若し死んだら——あれやこれやを思えば名残りはつきないが、まゝよ〝俺にはたゞ念仏がある〟病床のかたわら、見易いところに、近角君筆の

〝乗大悲願船浮光明廣海、至徳風静衆禍波轉
即破無明闇　速到無量光明土云々〟

の謹録聖訓とある軸がかゝっている

〝即破無明闇〟が特に目を惹く。こゝまでは現在として解すべきだと心証する。

歎異鈔のこゝかしこが、それからそれと浮んで来る　一文一句　かな一文字に至る迄、張りきった迫力を以って身に逼り心に泌みる　長鯨の百川を吸うように、私がではない。鈔の言葉が、私の全心身を呑み込んでしまう。

もし生きたら、幸に死線を越えたら——今現に体感しつ

つあるこの味わいについて、今一度有縁の人々と語りたい。

これが私の唯一つのこされた念願であった。

死の横顔を横目に見ながら、病床に呻吟している間、いくたび〝たゞ念仏〟とうなづかされたことであろう。例えば、或る時は熱の加減で、たまらなく全身が熱い——断っておくが、当時私の生命を脅かした病気は急性腎臓炎で、この病気はいろ〳〵錯覚を惹起するそうだ——すると、私は忽ち熱さに苦しめられる地獄にいる。私ばかりではない。他にも大勢の罪人がいて、皆もがき苦しんでいる。併し私には〝たゞ念仏がある〟と心に叫ぶ。私は身体に苦熱を感じながら、心にはゆとりがあって、恐らく顔にはほゝえみの影さえさしていたろう。私の苦しみは、たゞ焦熱地獄の見学にともなう実験に他ならないからである。

また或時はたまらない悪寒に襲われる。今度は寒さに責められる洞窟だ こゝにも罪人がうよ〳〵いる、けれども私には〝たゞ念仏〟がある。今は八寒地獄の視察中なのだ。案内者は〝たゞ念仏〟だ。

また或る時は視察の方面をかえて、地上の人間の世界に遊ぶ。すると、情緒纏綿の愛執的生活やら、名聞利養の打算的生活やら、様々の生活の成功者と目される古今東西の代表とおぼしい面々が、したり顔に順繰りに影現する。それからまたやや方面を転じて、智識学問、道徳、宗教、事業、発明、冒険等々の境地を巡礼することもある。乗物はいつも〝たゞ念仏〟の飛行機である。

こうしていろ〳〵の人界を見て廻ると、中には随分愛すべく羨むべく、崇敬すべく、驚嘆すべく、各種各様の深刻な感興をそゝって、低回去る能わずの概ある場面にぶつかる事もあるが とゞのつまりは〝それがなんだ。俺にはまだ念仏がある〟という合言葉で、フワリとその境地を乗切って次の境地に移り、そこでまた似たような経過を繰返しては、又次の境地に転ずる。その都度〳〵の合言葉、畳句はいつも〝たゞ念仏〟である。

私の飛行機〝たゞ念仏号〟がめざすところは、畢境〝ただ念仏の世界〟であった。そこのみが私の志願を残りなく満たしてくれる世界であるからであろう。白道の上空はるか、層雲を衝いて〝たゞ念仏号〟は飛翔する。

こゝまで読んで来ると、何だか痴人夢を説くと言ったような感を抱かれる方もあろう——私自身にしてからがそうだから——が、單なる夢ばかりではない。現に私の今日までの生涯も、考えて見れば大体こんなものではないかと思う。

〝即破無明闇〟私の行方は闇である。ことに近く死と面と向っては、真黒闇の闇である。そこに、その時忽然として閃く〝たゞ念仏〟私には巨人の腕にかざされた松明としか



思われなかった。実にこの閃きこそ無明長夜の燈炬であり、即破無明闇は、その光芒のとゞく限りである。

私には〝たゞ念仏〟がついて離れない。念仏だけでよさそうなものなのに、何時も〝たゞ〟が冠さるのがおかしい——おかしいと言うのが変なら不思議だが、実は不思議でも何でもない。歎異鈔の文句からきている。先ず第一には第二章の——私の講演にはよく出てくる、ほとんど口癖のようになっている——親鸞におきては〝たゞ念仏して〟の〝たゞ念仏〟である。今一つは、末尾に聖人の仰せとある〝よろずのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、たゞ念仏のみぞまことにておはしける。〟の〝たゞ念仏である。

どちらも〝たゞ念仏である。たゞとはほかのものでない。たゞ一つのという意味である

私について離れなかったあの〝たゞ念仏〟はそも〳〵どちらの〝たゞ念仏〟であったのだろうか。

初めの程は私自身も、どちらのか判らなかったが、〝たゞ念仏〟にかわりはないから、どっちでもかまわない、同じ事だと思っていたが、よく〳〵考えて見ると、同じ念仏でも、これをあてがう方面の如何によって、多少その趣きを異にする。八面玲瓏とはいゝながら、西からみると、東から見るとでは、富士の輪廓に幾分の相違があるようなもの、第二章の〝たゞ念仏〟は師が手づから弟子に授ける巻物一巻である。念仏の奥義がこれにしたゝめてある。末尾の〝たゞ念仏〟はその奥義に精通した弟子が、念仏の正味をかみしめて、玉石の混淆を嫌って、他のあらゆる似而非者をはねのける篩である。

してみると、さきの闇中に閃いた〝たゞ念仏〟は巻物一巻の〝たゞ念仏〟であり、信仰を抜きにした人生の諸相を〝それがなんだ、俺にはたゞ念仏がある〟の掛声で、飛び越え、飛び越えしたあの〝たゞ念仏〟は要するに篩の〝ただ念仏〟であったのである。

〝煩悩の犬は追えども去らず、涅槃の月は招けども来らず〟とはよく聞くことではあるが、私の〝たゞ念仏〟はそうでない。追えども去らぬ煩悩の持主の私に、招かざれどもつきについて、毬のように離れようとしないのである。

随時随處、念頭に浮ぶのである。神秘の兜をさゝげて、湖畔に佇む八重垣姫を繞って 点々として燃え出でる狐火のように。私はこゝに袖を捕えて離さぬという摂取不捨の利益、〝我能護汝〟という御約束の効を体感して、今更のように唖然たらざるを得ない。

〝我能護汝〟の御約束の前には、〝汝一心正念直来〟とある。この〝一心正念直来〟というのが、〝本願招換の勅命〟即〝たゞ念仏〟と全く同義である。言わば一心は〝た〟であ

り、正念は〝だ〟である。直来は〝念仏〟である。一心正念直来は〝たゞ念仏〟の翻訳と見られる。

ついでに直来の訓読について一言しておく。直来を直に来れと読むべきは言うまでもないことであるが、放浪の子が故郷へ帰って来る日を待ちかねる母の心に譬えれば、直来にスグキテオクレヨと仮名をふることも許されよう。

あゝ〝一心正念直来〟〝たゞ念仏〟この外に何があろう。

前に私は、もし生きたら、私の全心身を呑み込んだ——怪物、ではない、歎異鈔のところどころについて、有縁の人と語りたいとの、最後にたゞ一つ残された念願を打明けた。だのに幸いに生きながらえて、今その念願を果そうとすると、呆れたことには何んにもない、綺麗さっぱりとなんにもない　おかしな譬えだが　鳶に油揚をさらわれた野呂馬のように何もない、たった一つ、依然としてあるものは、〝たゞ念仏〟だけである。

あの当時、あの勢をもって迫った歎異鈔、特にその第九章後半の如きは、未だかって覚えない迫力を逞しうして〝いそぎ浄土へまいりたき心のなくて〟〝死なんずるやらんと心細く〟〝苦悩の旧里はすてがたく〟〝力なくしてをはるとき〟〝いよ〳〵大悲大願はたのもしく〟など言々句々、私の一呼一吸の感があったのに、今は〝たゞ念仏〟ばかりとは!?が、考えてみると別に不思議はない。実は既にあの当時、それからそれと思い浮んだ文言も口の中で誦するにしたがって、片っ端からすぐ〝たゞ念仏〟に還言されたのであった。だから歎異鈔全体は、要するに、徹頭徹尾〝たゞ念仏〟の連鎖に過ぎないのであった。わざ〳〵岡山から見舞に見えた信友に、半ば遺言の意味をこめて、この趣を話したことを覚えている。

そうだ。〝たゞ念仏〟は源であると同時に海であるのだ。独り歎異鈔には限らない。なんでもかんでも、真宗一切の権威ある文献は、皆こゝに発起し、皆こゝに帰入するのである。今死ぬという矢先に、長々しい文句や、こみ入った筋道がわからなくてはいけない、では間に合わない。これだけは心得おくべしなど、条件がついては、やりきれない。〝たゞ念仏〟の一つにおさまればこそ、ほんに〝たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ〟である。

その〝たゞ念仏〟がぽっかり念頭に浮ぶ。それがそのまま如来廻向の念仏ではないか。それがそのまゝ〝行者のためには非行非善〟としての念仏ではないか。それがそのまま〝念仏まうさんと思ひ立つ心〟ではないか。そしてこの心こそ、信的生活の始中終を貫く常住不壊の生命であるのだ。

〝たゞ念仏〟から連想してか、御文で聞きなれた〝たゞ白骨のみぞ残れり〟という文句に想到する。更にその語呂に



合せて〝たゞ念仏のみぞ残れり〟とくちずさむ。信ある人の臨終のある刹那には、有ってもいゝ、羨望に値いする転向だ。たゞ念仏のみぞ残れり、さてその次に来るものは

〝速到無量光明土〟

の大団円だ　　（仏と人）

## 歎異鈔（第九章）

念仏まうしさふらへども、踊躍歓喜のこゝろ、をろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば　親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをさへて、よろこばせざるは煩悩の所為なり、しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。また浄土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所労のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも、煩悩の所為なり。久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだむまれざる安養の浄土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩悩の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこころのなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ、踊躍歓喜のこゝろもあり、いそぎ浄土へもまいりたくさふらはんには、煩悩のなきやらんと、あやしくさふらひなましと、云々

# 生きるも御恩・死ぬも御恩

川畑愛義

死の神さまはこう言いました。恐ろしいとばかり思いこんでいたこの死の神さまが、実はそれが永遠の安らぎを与える救いの神さまのお使いであったのです。

私たちはときに必要以上に老いや死を恐れていることがあります。

臨済宗の開山慧玄禅師は

「わが這裡に生死なし」

と達観されています。

**ただほれぼれと仏恩を**

これに対し親鸞は歎異抄のなかで次のように述懐しているのは有難いことと思います。

いそぎまいりたき心なきものを、ことにあはれみ給うなり、これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じさふらへ、と。

ふつつかながら私は医学の道に進み、なまじっか頑くなな科学精神におぼれ、いつか自分が納得すれば、理解できたら、仏説も信じようと思い通していた時代が長かったのです。しかし、所詮、有限相対の次元から無限絶対の世界が分かろう筈がない。このことはきわめて簡単明瞭の道理なのに、頑迷な眼にはそれが到底見えなかったのです。

さらに親鸞はやさしく語り次いでいます。

すべてよろずのことにつけて、往生には、賢き思ひを具せずして、ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なること常に思ひ出しまいらすべし。と

私たちは死の影を冷たく、暗い思いで眺めるのではなく、その影を落としている光をこそ頼もしく、明るい思いでほれぼれと仰ぎたいものです。

これは百八十度の人生観の転換にもつながる筈です。

たとい悩み、恐れ、不安、悲しみ、苦しみなどなど、数えあげれば百八煩悩は尽きるところはないにしても、良き人の勧めに従ってこの仏説を信じて生きたいものです。



**少女の死**

ドイツの叙情詩人、マチアス・クラウディウスの短かい詩文に、「少女と死」があります。この詩はシューベルトが〝冬の旅〟の中に組み入れて作曲して一層有名になりました。これは死の神さまと少女の対話から成り立っています。先づ少女は嘆願します。

「あっちへ行ってちょうだい。恐ろしい死の神さまよ、私はまだ若いんです。

行って、お願い。

どうか私にさわらないで下さい」。

すると死の神さまは、

「手をお出し、美しくやさしい少女よ、私はお前のお友達だ。

罰をあなたに与えに来たのではない。

落ちついておいで、私は乱暴はしないよ。

私の胸の中に安らかにお眠り」

―――○―――○―――

**念仏詩抄**

御信心

わたしの信心

雪だるま

オテントさま出りや

すぐとける

オテントさまが

ご信心――

なんにも

なんにも

言うことなし

なんにも

言うことなし

ナムアミダブツ――

# 和光同塵

榊原徳草

私は毎月門前の掲示板に何かを書いて、道行く人々に読んでもらおうと、そしてそれで何か内側に自己を反省してくれたらば、と願いをこめて書いています。始めの頃は「仏様の言葉」と題して、「釈尊の金言」を書いたのです。すると子供等が通るたびに「仏様の言葉」と自転車で走る子もあり、立止って読む子もありました　遠く宿縁を喜べの金言、又は「久遠この方、子故の廻向、私一人を片思ひ」と池山栄吉先生が詠じられたように、久遠という何千万年も前から　喚びかけ叫び続けられた縁によって、それが御縁となり遂に私に仏法が聞こえてくる、そういう仏の「大音響流尽十方」の浄土からの大声の呼びかけも、穢土の娑婆には世界が違うので聞こえない。然し「釈迦往来八千遍」と申す通り、釈尊は姿を変えて八千遍も、此の土に来現されていられる筈です。「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず　即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到り大般涅槃を証し、普賢の徳に遵ふなり、知る可し」とあります。聖人は、大切な所には必ず終りに「知る可し」と強調されます。「いゝかね、解ったね」と　こちらを向かれるのです。この普賢の徳というのは文珠菩薩は智慧の菩薩であり、普賢菩薩は「慈悲の菩薩であります。即ち「仏心とは大慈悲これなり」と聖人の仰せの通り、普賢の徳によって、又は仏は娑婆に菩薩の姿を以って現れ「慈悲を本として、我等に接して導いて下さって居られる。それが誰なのか我等には解らない。或は近角常観師であるやら、池山栄吉先生であるやらわからないが　慈悲を主体として「和光同塵」して下さっている。「光りを和らげ、塵に同じく」一つになって導いて下さるのであります。「慈」とは、いつくしむことで抱いたり頭をなでたりすることで、「悲」とは煩悩の中へ同じ煩悩をおこした人となり、その人と一体になって導いて下さるのです。たとえば、蓮根は、泥土と泥水を養分として育ちます。泥を栄養分とし泥水をも栄養分とし蓮根は太り大きく



行巻八三

法名

成長します。然し遂には泥水と泥とを突きぬけ、その世界を脱けて水上に姿を現し、四方に妙えなる香気を放つ白蓮華の花を咲かせます。煩悩の中に入り込み、それを養分として遂に煩悩を脱出して　南無阿弥陀仏の名号となられる。名とは因位の時を言い。号とは果位の時を言う。と自然法爾章の最初に出ています。「獲(因)・得(果)・名(因)・号(果)」人が死すると法名を付けますね、「法名何々」と。私の居る禅の寺、念仏禅と申す念仏の有る禅ですが、過去帳と言って死者の法名を書き残すのですが、その帳面を「法号帳」と言います。真宗では「因」の方を取り、念仏禅の方では「果」の方を取っています。

さて、朝日新聞の昭和六十年十二月三十一日の「今年私は、世の中は」の欄に、大学教授の野辺地正之氏が次のように書かれて居ります。

「人間は、人間にとって狼である、互に殺し合う」と、そして、「狼は狼を殺さない」と書き、「命というものは、はかないからこそ、尊く厳そかで、美しい」と。

人間は人間を殺し合い、戦争は地球上で何所かで行われてる。狼に劣る動物が人間である。哲人は「人間は葦のように弱い。然し考える葦である」と言った。その考える人間が狼にも劣る殺し合いをしている。何という不可解な現実だろう。心が外に開いて欲望に燃えているのではないか、戦争の止まないのは欲望の為ではないのか、「命というものは、はかないからこそ尊く、おごそかで、美しい」　野辺地教授のこの語を心に銘じて、命の尊さを胸にしっかり抱き締めたい。「生死事大、無常迅速」という、「生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等をば、弥陀弘誓の船のみぞ、乗せて必ず渡しける」。我々は生死の「生」だけに足場を置いて、生死輪廻を何億年、六道をさ迷い続けて来たが、方向を西方浄土と定めて頂き　御浄土に生れさせて頂き、直に還相廻向の御徳によって「普賢の徳」に入らせて頂く。

法然上人は、智慧が邪魔して念仏に遭うことが遅かったので、次の生には無学文盲の人に生れたい、と言われたといわれる。それで四国の「庄松」同行は、法然上人の再生者だと言われている。

命なき砂の悲しさよ　サラサラと
　握れば指の間より落つ
大という字を百あまり書き
　死ぬことをやめて帰り来れり
（石川啄木）

「頭を挙れば残照あり、元これ住居の西」夕方の赤い残照が裏山の彼方に一日を終ろうとしている。ああ！私は西山の（西方浄土）麓に元から住んで居たのだった。

浄＝は生活を浄めるという字、争うことを水に流すこと、殺し合いを止めること。

# 本願真実に値う

井上善右エ門

本願に値うということは、最早や疑うにも疑いようのない如来の真実に目みえることであり、そのとき、今までどうにもおさまりの着かなかった私の心に、奇しき開明がもたらされ、そしてこの真実に値うために生れてきたのだと知らしめられます。それを曇鸞大師は「能く衆生の一切の志願を満てたまう」と讃えられました。私の究極の願いと、仏の本願とが一つに重なるのです。有難いことであります。

本願に値う広大な事実の外に信心とてありません。それを遮りつゞけるのが人間の計い心であります。とめどない不安と疑念とはこの計い心から生れます。しかしこの計いも、本願真実の前には闇の光に対するごとく、必ず照破されるときが来ます。焦ることは徒らに身心を苦しめることになります。たゞひたすらに本願の真実を聴聞することです。「仏法は聴聞に極まる」と申されています。計い心が追いつめられながら、頑張っている。それが人間の業の姿です。「如何に不信なりとも聴聞を心に入れ申さば、お慈悲にて候う間、信をうべきなり」という『聞書』の仰せは尊くも有難い言葉です。闇が光に破られるというと、暗雲が奇麗に洗い流されるように感じますが、そうではなくて、暗雲あるがまゝに夜が明ける。聖人が『正信偈』に「譬えば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明かにして闇なきが如し」と誦されているのは、これまた何とも有難いお言葉と申す外ありません。

本願は、このあるがまゝの身に入り込んで下さいます。本願に値うときの様子を聖人は「義なきを義とすと信知せり」と申されています。「義なきを義とす」というのは聖人のよくお用いになった言葉の一つですが、それは師法然上人の常の仰せごとであったようです。『末燈鈔』にその事が記されています。「義なきを義とす」という初めの義は、われわれのとやかくと計うことであり、後の義は法の徳の故にしからしめられることですから、本願に値うとき、計いの境界から法の徳の世界に入らしめられることを、よろこび



仰がれて「義なきを義とす」と申されたのです。即ち本願に値うことは如来の真実心に直面し、法の徳に浴する身となることですから、最早や疑うにも疑を入れる余地なき身となります。信心とてこの外にはありません。

覚如上人が、法然上人の伝記を書かれた『拾遺古徳伝』の中に（第九巻）、上人の弟子随蓮についての感銘深い物語りがあります。随蓮は学問のあった人とは思われませんが、晩年の師上人に仕え、吉水の法難によってお師匠が四国の配所へおもむかれたときも、お伴して老上人にお仕えした人です。『古徳伝』によると、上人御臨終のとき随蓮を召されて、「念仏は様なきを様とするなり、たゞひらに念仏申すべし」と、さとされたとあります。「様なきを様とす」とは全く「義なきを義とす」と同義でありましょう。

ところが上人御往生の後、数年を経たころ、あるお弟子が「念仏は三心具足の念仏でなければ往生かなはず」と強く説いたのです。随蓮が、「故上人は自分に対して、そのようなむづかしい三心ということは申されなかった。たゞ様なきを様として念仏せよと申されるばかりであった」と応えますと、相手のお弟子は、「それは無学な人に対してわかりやすく心得さすための方便で申されたに過ぎない」と、経釈を引用して説き聞かせます。それを聞くと、素直な随蓮はさもあらんかと思い、自分に三心があろうかという疑問が起り、誰れに聞けばよかろうかと煩悶し、夜も眠られぬ状態になりました。ところがある夜、随蓮は不思議な夢を見たのであります。

随蓮が自分の庵を出て歩いていると、いつの間にか鹿ヶ谷の法勝寺のほとりにさしかゝったのです。思わず門をくぐって中に入ると、庭の池に蓮の花がえもいわれず美しく静かに咲いている。浄土の蓮もかくの如くであろうかと思いつゝ、西の堂をみれば、そこに沢山の僧が居並んで、浄土の法門を談じておられる様子です。随蓮が廊下に上って進むと、そこに思いがけなくもお師匠法然上人が、北から南に向って坐っておられるではありませんか。

随蓮が驚いてかしこまると、上人が近く来るようにとさし招かれる。随蓮がなつかしさの余りおそばに参ると、上人が、そなたは何か深い心配を抱いているようだな、けれど案じることはない、私がこゝにいるからと申される。随蓮はまだ何も申上げていないのにどうしてご存知なのだろうかと不審に思いながら、胸にたまる思いの一部始終を申し述べたのであります。

すると、上人は何も言われずに、池の方を指して、随蓮よ、蓮が美しく咲いているな。もし誰れかゞ来て、あれは蓮の花ではない、梅である桜であると申したら、そなたは何とするぞと。随蓮は躊躇なくお答えして、現に蓮の華で

ございますものを、誰が何と申しましょうとも、どうして梅である桜であると思えましょうや、と申したのです。すると上人が「念仏の義もまたかくの如し」といわれ、源空が示した念仏の真実にあいえたならば、それは蓮の華を蓮の華と見た心と同様である。三心は念仏一つの中に法爾とおさまっている。念仏を頂戴したものは、梅や桜といわれても心の動ずることはない、と語られるのを聞いて随蓮が、ハッと感じた途端に夢は覚めたというのであります。

この物語りは感銘深いものをわれわれに与えてくれます。本願に値うということは、蓮の華の色形を間接に聞いて理解することではありません。現に只今、その蓮華の前に自から立って観ることです。そのときわが心の渇は華の香気につゝまれて必ず癒されます。それが大悲に摂取せられまいらすということです。聖人は、お手紙に「往生の心うたがい無くなりて候ふは、摂取せられまいらせたる故と見えて候、摂取の上はともかくも行者のはからいあるべからず候」と、しみ〴〵と述懐されております。

慈光誌の恵みを受けて幾歳月、有難きご恩に浴しました。花田先生が此の世に遺して下さる何物にも代えがたい贈物こそ慈光誌三十八巻です。それは先生の信心と精根との結晶であります。稽首礼拝せずにおられません。有難うございました。合掌　（六一、五、二八）

○

花田正夫

生かされて生くばかりなり御仏の深き誓のあるにまかせて

かぎりなき歎異の涙唯円の心も知らで五十路すぎゆく

○

源通寺和上（安心小話より）

香樹院講師の仰せに、我身の誤りはみな弥陀の知りぬき給うことを知らずして、悪いこと隠して浄土往生する機ゆえ、まことの喜びに縋られぬなり。それ故善導は無有出離之縁とのたもう。自分から助かる道理こしらえるように思うゆえ、晴れなんだ疑なり。

又曰く、今迄はどうたのんだら助からう、どうしたら参られようぞと、己が方に浄土参りする心こしらえて生るゝこと、思うたに、心止めて聴聞してみれば、残らず彼方の方に御成就なされた六字の名号、何のようもなく、なにの造作もなく浄土参りすると思えば、人頼むようなたのみでない。



# 慈光日誌抄

## ——名残り惜しく候えども——

西元宗助

(一)

去る四月十二日のことであった。花田先生夫人から、「花田が病気を再発し入院致しまして、慈光誌をつづけることが出来なくなりましたので、五月号限り廃刊と致すことになりました云々」のお葉書をいただく。かねて覚悟はしていた筈であるのに、いざとなると、あわてないわけにはいかなかった。よほど病状が悪化したのに違いない。ともかくお見舞いしなければと思いたつ。そして家内同伴、名古屋のセントラル病院にお伺いできたのは、四月十九日。

御病室に入り、一見して驚く。顔面、蒼白くやつれ、ご挨拶しても漸く頷ずかれるばかり。これは容易ならぬ病状である。看護の花田先生令弟夫人や附添い婦の方のお話によると、食欲全く不振で点滴による栄養補給にたよるのみと。先生は低いベッドに臥床しておられるので、私は椅子から降りて床上に膝まずきながら、先生の手を握りしめる。すると、目を開かれて、「ありがとう、この次はいつ」と、おっしゃる。「なるべく早目に」とお答えして、辞去する。医務室に立寄ったが、土曜の午后で不在。不安でならない。思わず、お念仏となえる。

よって所用をすませて、京都に帰宅するや、ただちに日本生活医学研究所の川畑愛義先生に電話する。すると先生（学生時代の愛称は〝愛ちゃん〟）「それは大変、しかし四月中の日程は全部、ふさがっている。五月九日に行こう。今から先方の主治医と電話で相談する」とのこと、これでホッとする。川畑博士は、池山栄吉先生の最後を見守った主治医であるが、専門は保健衛生学（京都大学名誉教授）。後で述べるように、私にとっては学生時代からの兄貴で、私ども夫婦の仲人でもある。ヴイールス研究では世界的な学者であった同じく念仏者の故東昇博士は彼の従弟。ともあれ、稀にみる親切な頼み甲斐のある男である。

その川畑さんから、（彼ももう八十歳の筈）。五月九日すぎに、

待ちに待ったお電話をいただく。「主治医にあったよ。君が病院に行ったころが最悪のときで、今は危機的状況は脱したようだ。油断は出来ないが、小康を保っていられる。問題はむしろ胸部にあるようだ、云々」と。私は、さっそくその旨を、浄住寺さん（榊原徳草師）その他にお伝えして、少しだけ安堵していただく。

さて、小康状態でおありとなると、娑婆の欲がでる。ことに五月十五日であったか、「慈光」誌五月号の届いた前後から、三、四の方から電話がくる、書信が届く。その後の先生のご容態はいかが。このままの廃刊では、あまりにも、あっけなさすぎる。せめてツイトウ号でもと。そう言った御本人、ハッと気づいて、あわてて、慈光誌への謝恩追悼号ですよと、言い直す。そこで私、そうだ、名残りを惜しむ感謝の終刊号を出させていただけたらと、思いはじめた。

あたかもよし、そうしているところに、名古屋の国広真量氏がご来宅くださる。その用件は、花田先生ご夫妻にお願いして、せめて六、七月の合併号だけでも出していただけないものであろうか。殊に先生の最近の御心境は、生死を越えて、まことにお深いものがおありのようで、もしその一端でも慈光誌にお漏らしいただけるようであれば、こんな有難いことはない。お宜しければ編集のお手伝いはさせていただきますと。

それで、わたしは決心した。幸い五月十八日は、岡崎市での例年の一道会である。よって前日の十七日、名古屋に途中下車して、まず病院に花田先生をお見舞いする。先日とは全く変って、先生が快方に向っておられることは素人目にも感じられる。第一、血色もおよろしい。こんな嬉しいことはない。ほっとし乍ら、まず『慈光』誌五月号の先生の「法悦その折々」の有難いこと、その平生業成のご心境をさらに承ることのできることを、みんなが願っていますと申しあげながら、つきましては、慈光誌、このままの廃刊はなんといっても惜しい。私どもお手伝いさせていただきますから、あと一、二号でもとお願いすると、「廃刊続号ですね、それではともかく、国広さんに来てくださるようお伝えください。あの方のお手伝いなしには、なにも出来ませんから。それに、この廃刊はもともと、あや（奥様）の決断ですので」と仰せになるので、「じつはこれから奥様のところに伺って、お願いしようと思っているところです」と言うと、肯かれる。

そこで先生のお宅に、津田よし子夫人にご同道願い、私ども夫婦参上し、起き上がることも出来ない、ご病床の奥様の枕もとで、縷々（るる）お願い申しあげて、漸くご諒承をえたことでありました。なお、誌代等の返金のこと、律義な奥様は、なお、繰り返し気になさるものですから、「そのことは、もう全く御放念ください。殊にこんどの終刊号で、そのことはすべて帳消しになるのですから」と、申しあげる。

○

さて、ここで先生ご夫妻を助けて編集事務をしてくださる前記、国広真量氏について、簡単に紹介させていただく。わたしが同氏を存じあげたのは、もう二十年前のこと。偶々わたしの実弟と同じ会社の秀れた幹部。しかも西本願寺の僧籍（下関市妙蓮寺）がおありで、事実、大学を出てから京都の旧真宗学研究所（故足利瑞義師）で、しばらく研鑽。数年前、会社を定年退職し花田先生に師事して名古屋に居住。なお若き日、臼杵祖山師のご教化もうけられた篤信の方で、お年はたしか七十。

（二）

いよいよこれで、「慈光」も終刊となるか。たしか発行部数は約千八百と聞く。これらの読者とも一応のお別れ。

それにしても、三十八年余、独力刊行された先生ご夫妻のご苦労、そのご恩徳は測り知れぬものがある。謝しても謝し切れぬものがある。

ここでまず、花田正夫先生の〝行実〟について、わたしの知るところを述べさせていただこう。

先生は岡山県出身、明治三十七年（一九〇四）生。旧制第六高等学校理科在学中に、池山栄吉先生の深き感化をうけ浄土真宗に帰する。ついで岡山医科大学（現在、岡山大学医学部）に進学するも第三学年のとき退学し、昭和三年（一九二八）京都大学文学部哲学科に入学し京都府八幡町善照寺（住職・横田慶哉師）に居住し、のち衆徒となる。哲学科では仏教学（羽渓了諦教授）を専攻、クラスメートに、長尾雅人（京都大学名誉教授）、松本解雄（故人、愛媛大学名誉教授）曽我了雲（故人、神戸・成徳女子高校長）等の諸氏。

なお当時、下鴨に前記羽渓教授の主宰する知四明寮という学生寮があり、そこに前記・松本解雄氏の外、向島諦宣（当時京大・大学院学生。龍谷大学教授）川畑愛義（当時・医学部学生、前出）宮地廓慧（当時龍大学生、勧学）長谷顕性（当時、龍大学生。光岸寺住職）等の諸兄が在寮し、昭和四年四月には、私（西元）も京大入学と同時に入寮する。ところで、この前後から、横田慶哉師を善知識とする熱烈なる信仰運動が興り、学生仲間では花田正夫氏（当時・大学二回生）を中心に、京大、龍大、谷大、さらには東山女子専門学校の女子学生も加わり、前記・知四明寮を本拠として「学生親鸞会」と名ずけて活発に運動が展開されるが、多少の弊害も生じて、漸次、方向転換する。

それは花田正夫氏の先生の池山栄吉先生が、大谷大学のドイツ語教師として来任され、京都に居住されるようになったことによるので、このように顧みると、池山先生のご

恩は絶大で、このころ禅僧・榊原徳草氏（洛西・浄住寺）も池山先生に帰依する。

尤も私は、前記の信仰運動には、当初からついていけないものがあった。それほど私は生意気であり高慢でもあったが、一つには、自分自身の不信心のためであった。わたしは池山先生のご法話、さらには足利浄円先生の人格と信心に、深く感動し、あらためて聞法し求道しなければならないという一念、いや同時に学問に打ち込みたいという念慮に燃えていたから。

このようなことのため、在学時代、わたしは当時の花田先生と接触する機会は殆んどなかった。したがって、先生が昭和六年、京大卒業後、大連の西本願寺別院に赴任されたことも、さらに名古屋西別院駐在に転任転住のことも全然知らない。申訳ないが、それほどに戦前は疎遠であった。

それが、どうして急速度に、先生に親近するようになったのであるか。それは昭和二十四年の秋、ソ連の抑留生活を終えて京都に落ち着いてからで、ある日、「慈光」誌が送られてきた。それを見て驚く。池山栄吉先生（昭和十三年寂）の御法話遺稿の外に、近角常観師（昭和十六年寂）のも。それに近角師のお弟子の福島政雄先生や白井成充先生のものも掲載されている。福島先生（教育学、広島文理科大学教授を経て建国大学教授）は、わたしの師であり、白井先生（倫理学、京城大学教授を経て広島文理科大学教授）は井上善右衛門兄の師である。

どうして、このようなことになったのであろう。はるかなる彼方の花田さん、いや花田先生が急に親しい近い方になられたのである、それは私にとって、ほんとうに有難い嬉しいことであった。というのも、学生時代の花田先生は、あたかも日蓮上人の如く熱烈に獅子吼し、高唱念仏して人人を畏服信服せしめるものがあった。しかしそれだけに、私などは畏敬しながらも遠ざからざるを得なかった。それがすっかりお変りになられたようである。それに意外にもご病身であると伝えきく。ぜひとも名古屋のお宅にお伺いしたい。しかし帰国早々の私は、数年間の学問的空白を埋めるためにも、また戦後の一変した社会状勢に対応するためにも夢我夢中であった。それに殆んど同時に帰国された井上善右衛門兄らと共に、足利浄円師中心（師没後は白井成充先生中心）の「自照」再刊のことで、日時の余裕がなかった。それで漸く先生宅をお訪ねできたのは、昭和二十六年の春であった。この日の感動は、忘れがたい。以前の意気ごんだ様子とは全く打って変った柔和忍辱のおん顔。ほんとうに温く迎えてくださって、しみじみと、今まで人様に得意になって、歎異抄を説き、ご信心を語ってまいりましたが、異れるもの、歎かれているものとは、このわが身のことでありましたと、そして、そのおん口もとから、しずかにお念仏がもれてくる、わたしは深く深く心うたれた。

承れば、なんども大病なさり、愛知県教護連盟主事も保護司の職も辞して、いまは「ひびの入ったお茶碗のような」わが身体（からだ）をと、傍らの同じく病弱のあや夫人を顧みられる。（あや夫人は旧姓、小林。三重県出身。京都女子大学の前身、東山女子専門学校のご出身。そのころの同期の親友、故向島諦宣師（前出）未亡人篤子さんの談によると、学生時代ご一緒に花田先生のご法話を聞きにいったこともあると。）

この日の感動は、わが身に刻みつけられて、今もなお、わが身にある。それから親しく教えを仰ぐようになって今日にいたる。次に、先生に関する秘話を左に披露しよう。

(三)

あるとき縁あって、京都・百万遍の浄土宗知恩寺の管長林露法師と懇談したとき、管長の仰せに、花田先生はお元気ですかと。実は戦時中、新興仏教青年運動がマルキシズムの疑いをかけられて逮捕され、名古屋の刑務所に収監されていた前後、お世話になったのが花田先生。その折、親鸞聖人のお話も承りましたと、泌み泌み仰せになった。

又、あるとき、それは梅原真隆師や曽我量深師のご逝去のあとであった。たまたまお訪ねした西谷啓治先生―わが国宗教界の大御所―が、これらの大先生がたが、この世を去られたが、比較的若い方で、あとを継ぐ方には、どんな方がおられようか。特に龍大や谷大の先生以外の方々でと、お尋ねになるので、わたしは即座にお答えした。

お若いとは申せませんけど、お東では安田理深師でしょう、お西では花田正夫先生でしょうと。さすが先生は、このお二人のお名前をご存知であった。それで仰せであった。お二人とも、もとは在家。そして、なんらかのいみで発心し得度して僧籍に入った方。しかし寺を持たず、教団とも不即不離の関係に止まり、文字通り非僧非俗でおありなさるところがよいのではないかと、仰せになった。

最後に、これはもう十年余の昔のことになる。あるとき京都・高倉会館の当時の館長・新田先生にお会いしたとき、先月の日曜講演は、名古屋の花田先生がご講師で、会館いっぱいの参集でしたが、その参集者の中に、なんとお写真などで見覚えのある、お西の新門様のお姿がありまして恐縮いたしました。新門様と花田先生とは、どのような御縁がおありなのでしょうかと尋ねられて、返事に困った想い出がある。それも今は懐しい想い出である。

○

いよいよペンをおく。只今、国広さんにお電話して、「先生のご容態は」とお尋ねすると、また食欲不振となられて

案じていますとのこと。どうなられようと、倶会一処の世界があたえられていると、あらたまって、南無々々と申すことであります。読者のおん方々、ながながと有難うござ

いました。花田先生奥さま、ほんとうに有難うございます。奥様もくれぐれもお大事に。五月二十九日。

# 二年間に親しい四人を失う

長谷　顕性

私は一昨年四月富山で白内障の手術を受けたが、不幸にして それがきっかけで ヴィールス性B型の肝炎にかゝり、いま猶自宅療養の半病人の有様である。発病当時それとも知らず自宅療養を固守していたが さる医師の強い説得にまけて五月下旬 砺波総合病院に入院した。幸に経過良好 早く元気になったので 月二回通院検査を条件として八月中旬退院を許された。少し宛家業も手伝できるようになったが、その年の冬の寒さ凌ぐのが大変だった。翌六十年四月、家内に附添われて京都の本願寺のある会合にまいったのが無理だったろう。急に身体が衰弱し八月再び入院せざるを得なくなった。今度も経過順調で担当の医師も私の病状と年齢なども勘案して、この病気の全治は覚束ない、一生涯病気とつきあい覚悟の上で病気の進行をくいとめるようつとめなさいといって九月下旬退院を許してくれた。今度は前回と異って身体の力が抜けたよう 頭のはたらきもことんと鈍ってしまい。その上老化現象も加って、仕事するのもものうく、すぐ倦きがくる。家人も憂慮して生きてさえもらえばそれでいいというてくれるので安心して起臥している。花田先生が御病気になられて、せめてお見舞にあがれる程になられたらとおもうけれど、それはどうも覚束ない。先生の半生の事業として月々私共を導いて下さっている「慈光」誌も廃刊されるまでになったと承って、かねてかくあることと覚悟しながらも、まことさびしいことこの上もない。実は私の発病前のことであるが、この地方在住の慈光誌愛読者によびかけ、誌友会を結んで毎月一回、慈光誌の輪読会をつづけて来た。今月の会では五月号を読んだが、今后は順次前号にさかのぼって通読し、縁のつきるまでつゞけようと申しあわせている始末。今般西元法兄より続刊を出すから何か書けといわれて錨と当惑し身辺の小事を二、三しるしてご勘弁を願う次第です。

一昨年のこと砺波病院に入院して一ケ月経った頃だった。売店で辱知の吉田房枝さんに会うた。きくと婿さんの茂さんが黄疸で十日程前から入院している。可成重態で食欲がないので困っているとのこと。翌日別棟の個室（二人）にたずねて行くと面会謝絶の札がかゝっていた。御本人は仰臥して点滴の最中であった。顔はどす黒く横腹からゴム管で排泄物を容器に流してある。物もいえぬありさま。点滴一日三回。還暦の祝をした直後急激に発病したと。私は多田鼎先生の「救の綱」という小冊子を房枝さんに手渡してよんであげて下さいといい辞去した。実は房枝さんの母さんは、吉田めよさんで、もうなくなって大分経つが五十年来の信の友である。若いころ絶えず往来して法をかたりあい、又最期十年間は毎月一回は必ず私方の法座にまいって下さった。亦父上の仁一郎さんもめよさんの導きで篤信の人となられた。名古屋の花田先生の法座にも度々参聴され、慈光誌をいつも携えて、すきをみてたのしみよんでいられた。こういう厚信の家庭に育てられた人たちだから、こんな機会に信仰上の修養をされる方がよかろうくらいの気持だったのである。四、五日后再びたずねると病室が一人個室に変っていたが、御本人は安臥して眠っていられ、苦痛もなさそうであった。まあよかったと直ぐ辞去したが然しこれが最後のお別れとはおもわなかった。十日程経ってたずねてゆくと病室がない。きいてみるとおどろいた。吉田さんは先月二十八日になくなって退院されたと。あなたに知らせるのもよくないと黙って退院されたらしいと。私は悲しいおもいを抱いて自室にかえり、ひとり念仏していた。

悲しいことはつゞくもの。しばらくすると岩井長平君が入院して来た。彼は私の同窓で大正六年小学校卒業以来一度も会うたことはなかった、したがって卒業写真の細長いやさしい俤があったのみ。気分のよい日彼の個室にたずねて行くと、白髪老衰の病残の身だけあった。奥さんがよびかけられると眼を辛うじて開けたが、誰が来ているのかわからないようなようすであった。先年、大阪で脳卒中で倒れ一旦恢復したが今度再び倒れてこの病院に入院したとのことだった。数日后午前中再度たずねた時は意識がはっきりしていて、奥さんがよばれると、はあ長谷さんかといって手をさしのべて、なつかしそうにほゝえんだ。しかしそれだけだった。私が急に退院することになって彼をたずねた時は意識もうろうとしていた。何にもいえずじっと彼の

顔をみつめているだけだった。年の暮彼の死の知らせがあって暗然とした。同窓の友とかく会い再びかく別れた。

森松行雄さんが私と同時に病院に入院していられたことは、退院后初めて知った。彼は私より二十才も若く、十年間も一しょに教員をつとめていたことがあるが、頭脳明晰前途有望の青年だった。果して昨年（五八年）さる高校の校長となりこれからと張り切っていられたのだが宿痾の胃病がすゝんでついに膵臓がんになり、しかももう末期で日夜激烈ないたみに苦しみ、麻酔注射でとめていられるのでもう時間の問題だとのことだった。通院の折病室に見舞うた。這入ってみると点滴中で細長い顔が頬がこけ下顎が鋭く突出していた。ぱっちり開いた眼は私を見てハッとせられたようだった。何かいわれたようだがきこえなかった。それから再び眼をつぶり苦痛にたえていられた。私は何にもいえず、傍の奥さんに病状などたずねて辞去した。その時「ありがとう」と力なくしかしはっきりいわれた。気のつまるおもいであった。その后三回見舞いにいった。病勢は依然強くもう本人も死を覚悟していられるようだった。それについて、その問題をたしかめたいと心構えてゆくのだが病人の顔をみるともう何にもいえなくなるのであった。我乍ら意気地なしと悲しくなった。忘れもせぬ十一月六日、明日まいろうと決意した日、森松さんの悲しい死のしらせに接した。享年五十五才。噫。

最後に長谷繁子さんに別れた。私の在所の主婦の方である。私が入院した時まっさきに見舞に来て下さったのだが。日頃余り丈夫でないがその頃腸の病が再発し八月下旬私といれちがいに入院され（九月一日姑さん死去により一旦帰宅）開腹の大手術をうけられて昭和六十年三月初順調に回復したと退院されたが実は結腸癌で手の施しようもなく本人に知らせず退院させられたのであった。果して日に日に身体が衰弱していった。度々お宅にまいったが、食欲が殆んどなく、御飯も五、六口するのが苦しく夜間は咳がはげしく、からだももうく、私はもう長くは生きておれぬようにおもいます（もう病気もうす〳〵気づいていられたらしい）又エンマ様が待っていらっしゃるだろうけれど死にとうもありませんといわれた。六月初ごろ三たび砺波病院に入院されたが病急に変り、大変な苦痛の中に三十日とうとう五十六才で世を終られた。家におられる頃ある方から、繁子さんの父（なくなっている）斉藤久作氏が大そう厚信であったことをきいた。氏の村の豪家の老主人が重病で苦んでいた時、久作さんは度々見舞い行き仏法聴聞をしんけんにすゝめられた。病人はインテリを以て自認していたからそんな話はまっぴらごめんと始めは相手にしなかったが、久作さんの熱意にうたれて次第にきかれるようになった。

奥様もどうぞお大事になされますよう。

――○――○――

浅原才市

ほとけが衆生さいどする
声が六字のなむあみだぶつ
聞かずとも聞かせるほとけが
なむあみだぶつ

お寺まいりが朝時にまいる
あさじまいりが浄土にまいる
浄土まいりは南無阿弥陀仏



けれどももうひとつというところがのみこめんのでわからん〳〵といわれた。最後に久作さんは、わからんでもよろしい私と一しょにお念仏をとなえて下さい必ずたすかりますというてナムアミダブツ々々々々と一しょけんめいにとなえられると、病人も一しょにナムアミダブととなえられ暫くしてこときれたと。久作さんはあゝありがたいことですと御内仏のお扉をあけてお礼のおつとめをされたという。このことを私は繁子さんにはなしてあげようと、おもっていてつい果さなかったが、父上の信仰にはぐくまれていられたことをさる人からきいてほっとしている。以上四人の方々は今どこに、どうしていられるか、迷える魯鈍の私は明かに知る由もないが、蓮如上人のお歌をおもいおこして念仏申すことである。『おぼつかな　まことのこゝろよもあらじ　いかなるところの住家なるらん』『いまははや五障の雲もはれぬらん　極楽浄土ちかきかのきし』

西元さんのお指図であわてゝ駄文を草しました。すいこうする間もなく、まずおくります。家内が申しています。老来ぼけて何にもわからん身になりました。それにひきかえ、お救いいよ〳〵明かになること不思議ですと同感でございます、そのことを書きたかったのですが、

先生の御病気のよくなられますよう念じております。

# 無相法信

岩崎成章

## 自覚について（一）

昭和五十三年頃の書信であるが、金沢の農家の谷内イトさんが種々の聞法の遍歴よりお尋ねした書信に対する無相師の御実感を率直に返信して居られますが、これを記載させて頂きます。以下はその書信。

さて今回のお手紙、くり返し読ませて貰いました。私なりの考えを書かせて貰いますから、どうか読んで下さい。

この度のお手紙は「自覚」ということを繞ってのお手紙と受けとれることであります。大変ありがたいお手紙であります。私はこうして各地の同信の方から、信心について、お念仏についていろいろお便りを頂くことによって、種々自分自身について考えさせられ、私の心の田圃を耕されて、こうした「法信」「御法の便り」が一番ありがたいのです。私自身が、そのお便りを御縁に、私自身のことが、だんだんはっきりさせられるからであります。今回の谷内さんのお手紙も「宿業の自覚」といったことについての「ここをはっきり先生流に聞かせて貰いたいと思いました」とあり、よく聞いてくれました、誠にありがたいことです。

私は私流に考え、御返事するほかはないのであります。然しこの問題は大切な問題であるように思いますので、今日の手紙で、十分に私流の考えを書くことが出来るかどうかわかりません。私の場合は、特に、先の生命はわかりません、ナムアミダブツ、私に聞かれるとなると、私の考えを言うよりも「唯信鈔文意」の親鸞聖人のおさとしを頂くほかはないのであります。私の善知識は親鸞聖人様と頂いているので、おさとしの中でも、この「唯信鈔文意」のお言葉が私にとってまことにありがたいのです。さてそのお言葉は「釈迦如来、よろずの善の中より、名号をえらびとりて、五濁悪時悪世界、悪衆生、邪見、無信の者に与へたまへるなりと知るべし」というお言葉であります。今日の御返事も、この聖人のお言葉によりつつ書かせて貰う外ありません。ここで特にありがたいのは「無信の者」というお言葉であります。

私、大正十年、満十七歳の時に「歎異抄」を読むようになってから、七十四の今迄に「歎異抄」はもう五十年くり返し、くり返し拝読申して来たのでした。悪衆生、邪見、といった「煩悩」については「煩悩具足」ということについては「煩悩具足」の凡夫のための本願念仏であり、本願名号であるということは、「歎異抄」によって、大体頂けても、谷口さんの今回の手紙にある言葉から言えば、宿業の自覚や、悪性の自覚は一応頂けたようでも、この自分が「無信の者」であるということが「歎異抄」ではっきりと頂けなかったのであります。大体どうも自分は「無信の者」でないかということは、なんとなく感じさせられても、ところが、悪衆生、邪見といった宿業の自覚や悪性の自覚の外に、自分は「無信の者」でないかということは、なんとなく感じさせられても。ところが、悪衆生、邪見といった宿業の自覚や悪性の自覚の外に、自分は「無信の者」であるということは、「唯信鈔文意」の聖人の、このお言葉によって自覚されたというか、つくづく思い知らされたのであります。ああそうだったか、オレという人間は、生まれながらにして、無信の者であるから、自分の力で、いくら信心を得よう、頂こうとしても、ご信心が得られなかったのだなァ。また何べん、何十ぺん、これで御信心を得たなあと思っても、やがて、それで崩れてしまい、もくあみのたよりない。不安な自分が残るだけだったのだなァ。それはもともと生まれながらにして、自分には「真実の信じ心」というものはない、全くない、根こそぎない自分だから、どう、自分の力で励んでみても、勤めてみても、求めてみても、真実心が得られなかったのだなァ、と気付かされたのでありました。何十年となく、そうした無駄骨を折ったのでした。自分では絶対出来ないことを、自分の力でしようとし、出来るかのように思って。

ところが、聖人ははっきりと、お前は、悪衆生、邪見、であるだけでなく、生まれながらにして「無信の者」であるということを「知るべし」かかる「悪衆生、邪見、無信の者」であるお前は、自分の力で信者になることは出来ない「ただ南無阿弥陀仏を頂くほかはないぞよ、如来様御廻向の、如来様がえらびにえらんで下さったお前の助かるための、ただ一つの『法』である。南無阿弥陀仏を頂くほかはない」ということを「知るべし」とおさとし下さっているのであります。この場合の「知るべし」は、我々愚かな凡夫の頭で、そういうことだと「わかれよ」「おぼえよ」「思いこめよ」というようなことで、それより外ない自分だということを思い知れよ。理屈や文句はともかくとして（理屈や文句のわかるようなお前じゃないから）悪衆生、

邪見、無信の者であるお前は、お念仏一つ、ナムアミダブツ一つよりないということ、そのナムアミダブツ一つということも、悪衆生、邪見、無信の者ということも、悪衆生、邪見、無信の者であるお前では、自分では到底わからないということを思い知れよ、ということが「知るべし」ということで、到底そういうこと、自分は悪衆生、邪見、無信の者であるという助からぬ「機」ということも、自分自身では徹底してわかる奴でないぞよ。またそうした者は、如来御廻向のナムアミダブツさま、お名号さま、お念仏さまでなくては、この世もあの世も、助かるということは出来ない。自分の力ではわからぬということを思い知れよということが「知るべし」ということで、そういうお前であるということを、十劫の昔に見抜ききって、知りきって（如来法蔵さまが）そういうお前の助かる「道」は「法」は五劫思惟のあげくに、念仏一つ、ナムアミダブツ一つより外ないと如来法蔵さまがそういうことを「自覚」するような力のない無信の私になりかわって御自覚下さって、悪衆生、邪見、無信の者であるというようなほんとうの自覚を、私自身が身についてはよう自覚しないまんまに助かるように、南無阿弥陀仏を、お念仏をすっかり御成就下さって、この南無阿弥陀仏を、やるぞよと、お与え下さっているのが、今の私へのお念仏さまであると、私は頂かせて貰っているのであります。そういう自分で、一生自分は本当に機の自覚も、法の自覚も一生わからぬまんま、実生活の上では、一寸も身については分らぬそのまんま、今のまんま、これからも一生わからぬまんま、本当の「機」の自覚は一生出来ぬまんま、そういう自分は念仏一つより外ない、ナムアミダブツよりないということも、そういう自覚も一生本当にわからぬまんま、身については実生活の上ではわからぬまんま、本当の自覚は出来ぬまんま息をひきとる。お前の「生死出離」ということも「迷いを転じ悟りをひらく」ということも「往生成仏」ということ、本当の自覚も、身についた自覚も出来ぬまんま、一切引受けるぞよ、それさえも一生分らぬお前である。自分であるということを「知るべし」。思い知れよ、思い知るということも出来ぬまんま、一生ちぎれちぎれにナムアミダブツ、ナムアミダブツと、阿呆の一つ覚えで生きてゆき、死んで行く外ないぞよ。その凡夫の素地のまんま生きて行けよ、死んで行けよ、それより外ないぞやということが、釈迦如来、万の善の中より名号を選びとりて五濁悪時悪世界、悪衆生、邪見無信の者に与へ給へるなりと知るべしという聖人様のおさとしではありますまいか。

## 自覚について　(二)

さてここでもう一度はっきり聞いて頂き度いと思うことは「無信の者」ということは、凡夫というのは、谷内さんや無相といったような、如来さまのお目から見ての、悪衆生、邪見、無信の者、愚かな者には本当の意味の実生活の上で身についての「宿業の自覚」といったような、気のきいたこと、信者らしいこと、念仏者らしいことはとうてい一生自分の力では出来ないということが「無信の者」ということであろうかと私は頂いているのであります。それで「御廻向の真実信心」とはどういうことであろうかということであります。

「歎異抄」の「結文」のむすびの言葉の中で、法然上人が「源空が信心も如来よりたまはりたる信心なり、善信房（親鸞聖人）の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり、さればただ一つなり」と仰せられている。「如来廻向の信心」「他力廻向の信心」「御廻向の真実信心」とはどんなものであろうかということであります。私がもし「無信の者」でないならば、私の力で本当の信心が出来るならば「他力廻向の信心」による必要はないのであります。もし私が自分の力で本当の信心が出来るのなら、もし私が「無信の者」でないのなら、如来様は御信心を廻向する必要はないのであります。もし私が自分の力でお念仏一つしかないとか、またお念仏一つとたのみに出来、信じられるようなら、自覚出来るようなら、如来様は「名号をえらびとりて、あたへたまへるなり」などせんでもよいのであります。ところが、本当の「信」も、本当の「行」も、本当の「自覚」もとうてい身について出来る奴でないから、信心も、念仏も、自覚も、皆「南無阿弥陀仏」一つにこめて「お名号一つ」にこめて、「名号をえらびとりて、悪衆生、邪見、無信の者にあたへたまへるなり」であり、これを「知るべし」とおさとしあっても、私たちが自分に「ああわかった、わかった」というような知りようでは、一時的ですぐどこかへ消えていってしまうものです。

その「知るべし」もナムアミダブツさま一つにこめて、「あたへたまへるなり」ではありますまいか、私達には本当の信心も、本当の念仏も、本当の自覚も、実際には身については出来ないので、それら一切をお念仏一つ、ナムアミダブツさま一つにこめて「あたへたまへるなり」「下さる」というのではないでしょうか。今現にすでに下さっているのではありますまいか。宿業の自覚でたすかるような人は「妙好人」であると思います。私のような本当の意味での「宿業の自覚」の出来ないものは本当の意味の「宿業の自覚」が実生活の上で一生出来そうもない人間は、本当の意味の「機」の自覚も「法」の自覚も出来んまんま、ナムアミダブツさまを、本願名号正定業と聖人さまがおっしゃり「あたへたまへるなり」とおっしゃる。お名号を、ナムア

ミダブツさまを、お念仏さまを、称えられても、称えられなくとも、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツと、頂くほかはないのでありますまいか。

「宿業の自覚」というようなむつかしいことは、それが出来る先生方や、妙好人にまかせて、悪衆生、邪見、無信の者とお見抜きの、お見とおしの如来さま、ナムアミダブツさまにおまかせして、私はただこの身、この心、この暮らしのまんま、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツと、頂くほかないのであります。称えても称えられなくても、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと頂くほかないのであります。お浄土さまにまいれても、まいれなくても、ナムアミダブツ、ナムアミダブツとあおぎ、頂くほかないのであります。こういう私は、本当の意味での身についての「宿業の自覚」＝「煩悩の自覚」＝「悪性の自覚」＝「悪衆生、邪見無信の者」という自覚、「念仏一つ」＝「ナムアミダブツ一つ」という「自覚」はとうてい一生出来んようであります。この自覚の出来んまんま、たすけて頂く、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと頂く外はない私なのであります。

『歎異抄』第二章の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰せをかぶりて信ずるほかに別のしさいなきなり。念仏はまことに、浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてや、はんべるらん、総じてもて存知せざるなり」ということも、親鸞はなんにもわからんのである。自覚といったことも出来んのである。浄土に生まれるか地獄におつるかわからないが、ただ念仏してミダに助けられようという「よき人」の仰せを頂くほかはない、ということなのでしょうねえ。

私としては「自分の自覚」＝「無相の自覚」といったことではなく、ただ聖人の「釈迦如来、よろずの善の中より、名号をえらびとりて、悪衆生、邪見、無信の者に与へたまへるなりと知るべし」という聖人のお言葉をただ頂いて、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツと頂くばかりで、自分としては「宿業の自覚」といった、本当の「機」の自覚も、念仏一つという「法の自覚」も自分としては、無相としてはまったく身についてないようであります。そして本当の「自覚」ということは「法」についても「機」についても出来ん自分であるということを日々、念々お知らせ下されてやまぬおはたらきを「廻向の真実信心」と頂いていることであります。「無信の者」といえば徹底して「無信の者」である。本当の「自覚」などといったことは、一生できないということをどこまでもお知らせ下さるおはたらきが御廻向の御信心であると頂かれ、そのような一生、「無自覚でも宿業の自覚は本当に出来ていない、出来ない自分である。宿業の自覚がちょっとも日常生活的には身についていない。「無信」＝「無自覚」の自分である。「我が身である」本当はどこまでいっても、無信、無自覚の自分であると、日々何かにつけて思い知らせて下さるわが内面のおはたらきこそが、御廻向の御信心であって、無相としては、宿業の自覚が出来るから、宿業の自覚が出来たから、それが御信心を頂いたことであるとは言えない、思えないのであります。むしろ御廻向の真実信心、信心の智慧、智慧の念仏によって、ますます無信、無自覚の自分であるほかない、ということを思い知らされるばかりであると言う外はないのであります。

今の先生方は自分の凡夫の「自覚」ばかりやかましく言っていないで、おおもとの如来法蔵さまの、大自覚を自覚させて頂くことが大切でないかと思うことです。

如来法蔵さまの御自覚、信心の智慧、智慧の念仏に照らされて、私たち愚かな何にもわからん、何にも出来ん者、我が身の宿業がぼんやりなりと思い知らせて頂け、お念仏一つより外ないことを知らせて頂けることと頂いておることであります。私は「学問」もなく、宿業の自覚も、自分で出来ぬ無能、無力、愚か者ですから、お念仏一つ、ナムアミダブツさまをたよりにし、たのみにさせて頂くばかりの者＝「無信の者」はただナムアミダブツより外ないということをお知らせしてやまぬおはたらきが「御廻向の御信心さま」＝「智慧の念仏さま」と頂いているのであります。

御和讃に

「智慧の念仏うることは法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」

とあって、念仏も「智慧」、信心も「智慧」本当の「自覚の智慧」は如来様より外にない。ナムアミダブツより外にない。御信心さまよりほかにないと、私は頂かせてもらっているのであります。明日の命はわからん心臓病の私ですから、今日感じているままを「私流」＝「無相流」に書かせてもらいました。

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

**（追記）**

「宿業の自覚が出来たことは信心を頂いたことである」との先生方のお考えは、一応も二応もそうだと思うのですが、それなら「どれだけその自覚が宿業の自覚が毎日の生活で自分の身について、宿業の自覚者らしい考えがうかび、宿業の自覚らしいことが口に言え、宿業の自覚者らしいことが日常の実生活の中で、自分に出来るかと考えると、宿業の自覚がどれほど身についているかと考えると、とてもと

# お喚び声一つ

國廣真量

見、無信、無自覚の愚かなまんま、助けて頂くほかはないことです。

ナムアミダブツ、ナムアミダブツのほかはないことです。

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

「歎異抄の第十六章に　廻心ということ、たゞひとたびあるべし」とある廻心の一心は「覚」であるか「不覚」であるかというお尋ねでありますが、そのことであったかどうか忘れましたが、ある人がそういう意味のことを、篤信の方にお尋ねしたら、その人曰く「そんなこと人に尋ねんでも得て見ればわかるわい」と言ったそうでありますが、信の一念の覚、不覚ということについても、よく例にとられる「カゼ引き」の覚、不覚にあてはまりはしますまいか、ヤハリ二つの場合がありましょうネ。

ハックションあっ今カゼ引いたとある場合と、いつとも知れずカゼを引いた場合と、大別して二つあるようですネ、



です。

「宿業の自覚もろくに出来んような自分」「出来ても、身につかん奴」とお念仏さまにおぼろげに、自覚させて頂くだけで、「自覚、自覚」と自分の力で、鬼の首とったように、人さんに言えるような自覚はようしないので、悪衆生、邪

### ㈠無相師との信仰問答

亡き父は、ながい求道の旅路において、いくたびか自己の信仰に失望したのでしょう、あの初めの頃の情熱的な喜びを語ろうともせず、晩年はたゞ念仏しながら、お喚び声一つと申すばかりでした。これに対し亡き母は東陽和上から御教化を頂いた、獲信前後の思い出を終生の喜びとして語り続けていました。このように亡き両親の喜びかたを偲びながら、私はどのように信じ味わうべきかと、形ばかりにとらわれて、長い間、悲心やるせなきお慈悲を頂くことを忘れていました。このことについて思いだすことは　無相先生のお便りに、

ところが入信の場合は「たゞ一つあるべし」であるから、Aも一回Bも一回それでAはAの経験から、信の一念の覚を主張し、BはBの経験から一念の不覚を主張するようになるのですね、信の一念の場合は、このカゼ引きの例から言えば、覚でも不覚でもいゝではないか、どっちにしても、過去のあの時がどうだ、こうだ、過去のある時のことを覚だ、不覚だと論じるよりも、過去のことはもう過去のこと、今の現在はどうかと言うことが一番大切なことではありますまいか、過去のある時が覚にせよ、不覚にもせよ、それ以後ズット今現在迄つゞいて信心が相続されているかどうか、ということが一番大切なことではないかと思うことであります。

AにあってもBにあっても、今現在信心が相続されているかどうか、今現在の毎日の実生活の上に獲得された真実信心が、生き生きと生きて働いて下さるのかどうかと言うことが　過去のあるときの覚、不覚よりズット大切と思うのであります。AもBも過去に覚にせよ不覚にせよ、信心いたゞいたつもりであっても、それが「つもり信心」であって、ホントに他力廻向の真実を獲得して、今現在にいたるまで相続され、今現在の日常生活裡の問題の上で、その信心が生きて働いているのでなければ、「つもり信心」で真実の信心でないことになります……後略」

無相先生は更に御親切に『七里和上言行録』から、覚は「盗人安心じや」不覚は「カゼ引き安心じや」と申されたことをお記しになり、つゞいて「高僧和讃」の曇鸞章および「教行信証」の信巻初めの御文を引かれ、終りのところの「たまたま浄信の獲ばこの心顛倒せず　この心虚偽ならず」と示され、君は今現在どうですか、と問い詰められたとき、一瞬不安となりましたが、そのすぐ下から今は亡き母が、終生喜んでおりました、「この凡夫の心から出てくるものは、末通(すえとお)るものは一もない」この言葉を思い出すと同時に、「真実のお喚び声一つ、お喚び声一つ」と申す亡き父の言葉が、どこからともなく出てきて、真実の浄信は如来のお心であり、お喚び声であったことに気付かせて頂きました。いくたび聞いても、間違い通しの自分を慚じるばかりでございます。

### ㈡病床の花田先生のお言葉

最後に花田先生の御病中のお言葉一つ二つ、二年くらい前に名大病院入院のとき先生は、

〃聖人はこちらを向いて御話をなさらない、聖人は何時も仏様に向っていられる、私達は聖人の後姿を通して、聖人のお言葉を聞くだけだ〃

と申されたことを思い出します。聖人のお言葉とは、如来に向って何時も自分を問い質(ただ)し、真実の如来のお喚び声を

聞き続けられているお姿だと申されています。聖人のうしろ姿を通して、如来のお喚び声を聞くより他にない、先生自身のお喜びの姿でもあります。

また今回の御病気はお言葉が少く、お会いするたびに、元気になって〝往生〟のことを書きたいと申されるばかりで、第一回の六十五才発病のとき〝死もまた我なり〟の大きな感動は、先生を病気から立ち上らせた原動力と思うと。この清沢満之師の〝死もまた我なり〟の御言葉を、自分もあやかりたいと思い、先生にお尋ねすると、何時も歎異抄の第九章を読めと申され、その立場に直面したら分ってくるよと申されるばかりでした。

その後、先生は入退院を何度か繰り返されながら、その中から至極のお味わいが、今回の〝往生〟のお心ではないかと拝察しますと、何とか早くお治りいただいて、さらにお伺いしたいと思うばかりです。とぎれとぎれにお聞きしたお言葉をお伝えすることは、先生の深意を誤り伝えることを恐れていますが、勇気を出して申し述べさして頂きます。

「往生とは、生も迷い　死も迷い　善も迷い　悪も迷いその生死、善悪の対立を乗り越えて、無生の生に生れさせて頂くことで、仏智に照らされ知らされて行く世界、私の信心ではなく、仏智に照らし出され、仏智よりたまわる信心、仏智よりたまわる念仏と言うこと、ただ仏智のお働き一つで生かされてゆく世界、池山先生の最後のお言葉、

「何も残るものはない、何も残るものはない、ただ念仏、だけが残ってくれる、偉いこったよ、有難いこったよ」

これだよ　また、

「一心正念直来（オネガイダカラスグキテオクレ）は六字、南無阿弥陀仏も六字、御念仏しかないんだね、無相さんの〝仰せ一つが念仏〟と言うことも、〝お喚び声一つ〟〝念仏一つ〟になるのだね」

と時折り病院に御見舞にゆくと、苦しい息の中からこのようなお言葉を断片的に……国広君、分ってくれよと言われんばかりに、申されるお姿を拝して、胸迫る思いのするこの頃でございます。

先生の一日も早くお元気になられ〝往生〟の妙味を、お伝え下さる日をお待ちするばかりです。　合　掌

# あとがき

花田先生の御病気急変による再入院のお知らせを受けて間もなく廃刊とのこと、余りの急に驚くばかりで御座います。長い慈光誌の歴史のなかには、何度か休刊になり、また休刊になろうとしたことはありましたが、まさか廃刊になろうとは、夢にも考えられないことでした。

いま一度廃刊の意味を私達の胸に確めたく、西元先生に御相談申し上げましたところ、お忙しいところ大変なお骨折りにより、諸先生の御寄稿を頂き、続廃刊号を発行することゝなりました。諸先生は花田先生とはことに深き御親交の方ばかり、慈光誌最後の御言葉でございます。

何卒諸先生の深意を法味されますように。

編集その他については、全く経験のない仕事で御座いまして、病床の奥様から助言を頂きながら　手さぐりで後戻りしながら、一道会の皆様と準備をさせて頂きました誤字、脱字、埋草も意の如くならず、不手際のことばかりと思いますが、御賢察の上お許しのほどを。

先生の今回の御病気は、風邪から肺炎となられ即刻入院となり、熱の乱高下で一時は心配いたしましたが　今は平熱となり峠を越した感じで御座います。たゞ食欲が全然なく、医師も早く食欲が出るのが先決だと申されています。

また奥様は自宅で寝たきりで　ペンも取れない状態で御座います。廃刊になりましたことですから、間違えて誌代の御送金をなさらないように、お手紙も先生や奥様にお送りになりましても　御返事を出しかねる有様で御座いますので、何卒お含み下さいますように。

花田先生御夫妻とゝもに、三十八年間生き続けた慈光誌も、いよ〳〵これで最後となりました。長い間慈光誌を通じて、諸先生からお育てに預りましたことを、心から感謝申し上げる次第で御座います。

これからは誌友の皆様とゝもに、地域をこえて、地下水のように念仏の輪が広がりますように……

合　掌

（國広生）

慈　光　第三十八巻　続廃刊号　七月十五日　発行
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

名古屋市天白区植田山六ノ八一六　印刷人　天野昭夫
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
名古屋市南区駈上二丁目十四ノ二九　編集・発行人　国広真量
電話　八三三局　〇三二八番　発行所　慈光社
振替口座　名古屋　六一二四七番
郵便番号　四五七